

広島俳句倶楽部

令和六年八月作品集

母 ちどり

私の母は、九十七歳です。膝が悪いので車椅子ですが、元気に暮らしています。以前は、私が通いながら、母は田舎で一人で生活していました。けれども、去年の四月、私が体調を崩してから、施設で暮らすようになり、そこを頻繁に訪ねています。施設では、歌やダンスなどの催しがあり、また、昨日は久しぶりに、母を田舎の家に連れて戻りました。私にとって、母と過ごす時間は、とても貴重で幸せな時間です。

風呂敷で衣類を運び衣更ふ

ハモニカに合はす懐メロ風薫る

食堂でみんなと食ぶる筍飯

腰掛けてダンスの後の麦茶飲む

昼寝覚母はこつこつ刺子して

新緑や母の家まであと少し

夏座敷まづ仏壇を拝む母

故郷の紫陽花活くる母の部屋

玄葵幼子庭をかけ回り

横に母乗せて戻るや青田道

《作品鑑賞》 綾乃

故郷やお母様の多彩な御句が印象的なちどりさん。特別作品ではお母様と施設から自宅に戻られたある日が、あたたく丁寧に詠まれています。

ハモニカに合はす懐メロ風薫る

食堂でみんなと食ぶる筍飯

懐かしいメロディーや、季節のご馳走を楽しみながら、お母様が施設の生活を入居者やスタッフと送っておられる様子が伝わります。お出かけの浮き立つ気持ちをハモニカが盛り上げているようです。

夏座敷まづ仏壇を拝む母

故郷の紫陽花活くる母の部屋

戻られた田舎の家は季節のしつらえがされており、お母様の心がほとけ、おつとめを行われる姿や、花に微笑まれる様子が目に浮かびます。

横に母乗せて戻るや青田道

少し疲れた帰り道、季節青田道が効いて、美しい田園風景の中の幸せなご家族の姿が見えてきます。年齢を重ねることや介護について、力を与えてくれる作品と感じました。

遠花火あすは大山道歩く

右手左手風鈴の鳴る村通る

また別の谷が分かれて百日紅

きちこうに俄かに鶯の声高し

最奥の村に開いて未草

早稲を行き晚稲を行きし牛馬かな

蝶々の国分尼寺に入れ替る

不如帰にちにち国分尼寺に聞き

青景園国分尼寺の行き帰り

中門を過れば蛸の寄つてくる

出窓から苦瓜をもぐ朝かな

蟬の声湯殿に響く朝かな

亀の子の沈むを追うて池の端

橋の影映してゐたり秋の水

背に地球感じ寝転ぶ星月夜

明星に夜の明け始む初涼かな

坂道の蟬骸掃き長崎忌

川岸で風に吹かるるカンナかな

漣の寄せる川岸秋の夕

雲間より大楠照らす金の月

くたびれて緑蔭に聞く鶯の声

五月雨は紫香樂宮跡に止み

一輪の笹百合にまた戻りけり

広げたる傘に音して送り梅雨

雨音の静まりてまた夏燕

時鳥よく鳴く駅に傘置む

この駅を去つまで鳴いて時鳥

昼下り浅沙の花のもう閉ぢて

恐ろしき葛の景のあり夏野かな

きちかうの花に見らるる心地せり

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

熊蜂の唸りつぎつぎ庭の木に

大潮の波に乗りたる川鷺かな

カラフルな日傘降り立つ無人駅

田草取腰のベルトに電話付け

雨上り一氣に蟬の鳴き出しぬ

夕蟬の声消え闇の深まりぬ

谷風に高く乗りたる黒揚羽

簾目あり簾並びて寺涼し

厨房の窓を這ひをり守宮の子

行き交ひの人なく毛虫這うてをり

あざみ

夏雲や壁当てをして友待つ子

満点の回答得し子月涼し

团子虫道路を進む真夏かな

病院の緑蔭ひとり歩きたる

一音に夏草戦ぐ川辺かな

鳥の如夏蝶の飛ぶ夕べかな

ヒロシマの舞台見に行く日の盛

炎天や雀鳴きつつ飛び回る

夏草を不意に踏みたくなりて踏む

歩道まで伸びたる葛をよけ歩く

亜矢

灼熱の一日凌げば大夕焼

夜濯や砂のこぼるるユニフォーム

吾子眠る小児病棟星涼し

強くあれ美々しくもあれ髪洗ふ

トンネルを出れば故郷蟬しぐれ

右耳に熊蟬左は油蟬

青紫蘇を貰ふ山路を掃く人に

鰻井を配つてゐたるテイルーム

大南風因幡の風車回しけり

飛魚の飛んで明石の空白む

綾乃

荒梅雨を車窓に見つ故郷へ

故郷へ浜木綿の道続きをり

等分に母の切りたる西瓜かな

万緑の故郷の夢に目覚めけり

目覚むれば玻璃越しに蟬鳴いてをり

退職のお疲れ様の握り鮓

富士山の裾野の上の雲の峰

青芒富士の裾野に広がりぬ

帰省子にブルーベリーをシヤムにして

幼子の蜻蛉を追うて右左

大畑恵

朝蟬の道の我が影濃かりけり

鳴きながら雀出て入る八重葎

溪水の音の飽かざる盛夏かな

万緑の山道妻と登りきる

遠山と夕日伴ひ夏の雲

湯来に聞く夏鶯や去りがたし

物干のシートに匂ふ夏日影

那活終へ子らが涼める橋の下

夏にだけ開くカフエに海を見る

夕涼や波の音せぬ遠の海

井藤希

濡れ縁や西瓜食ふ子の笑ひ声

打水や尻尾を振つて犬の来る

門前に落花重なる百日紅

草茂るホーム短き無人駅

熱帯夜丑三時も過ぎにけり

忘れじとカップ酒置く墓参

井戸水で母の手洗ふ墓参

をちこちに鳴く秋蟬のしづかなり

秋蟬の落つる音する石畳

秋の蟬散歩の道も暮れにけり

栄吉

青竹のしなり涼しき坂下る

朝曇地を摺るごとく鴉飛ぶ

山住みの手に余りたる夏の草

藪漕ぎやねうてもまた蜘蛛の網

摘めば手に漁登顔の頼りなき

風の止む風土記の丘に蝉しぐれ

石棺の蓋に零れて百日紅

忘草今ひとときの夕日差し

雲高き丘の斜面に葡萄垂る

風止んでなほも揺れたる欄の花

暁子

初蟬や朝の身支度してをれば

軒下に出入りしてゐる夏の蜂

向ひの家向日葵二つ今五つ

郷の木の枝をねひに男寄る

網戸拭く夜来の雨の粒ありて

夕焼の染めたる雲を見つめをり

烏瓜の花を見に行く夜道かな

蟬しぐれ林の中の家に着く

かなかなの声のテラスに佇めり

去ぬ燕山のあなたへ越えてゆき

すみれ

頂上は雲の中なり麦茶飲む

右左振り分けられて遊び船

青岬ぶつかる波を見てゐたり

百日紅の影揺るる碑に手を合はす

熱帯魚日の傾ぐ頃見てゐたり

ふいに背を風通り過ぐ秋初め

新涼や一画目なる点を書き

胸元に向きを変へたる赤蜻蛉

ふくらみて二重となりぬ踊の輪

盆荒の芥寄せ来る磯に立つ

知佳子

故郷へ帰る道々令歎の花

母が家で幼子達の西瓜割り

幼子の作りて回す風車

臨月の娘帰りて鰻食ふ

ミニトマト母の施設で育ちをり

木に止まる蟬をよく見る今年かな

真夜中に籠を出るなり兜虫

枯葉の下昼にがきこそ兜虫

夕方から親子そろひて夏祭

母が家に行く度探す茗荷の子

ちどり

匂作りに倦みて眺むる梅雨の月

増してくる雨雲の色令歎の花

止まつては走る蜥蜴や草の蔭

あの雲の下雨降るかビール飲む

坂上の家目指しをり百日紅

少年の走つて帰る夕焼空

旅立つや車窓の町の雲の峰

諏訪湖から富士見ゆる日やかりん咲く

友と会ふ赤坂見附夕まくる

葦水漬く紫の穂のさはさと

辻純江

薰風の中に在りては長話

薰風を頬に受けつ家に着く

町内の祭に吾子と浴衣着て

夏祭太鼓の音に引き込まれ

よちよちの浴衣姿に話しかけ

夏祭囃で当てたり米ニキ口

泳ぎ止め夜光虫へと目を凝らす

月下美人たびたび覗き閑花待つ

月下美人ゆるり戯らむ今宵かな

今日もまた私に会いにオニヤンマ

雲雀

人混みにクラクション鳴る迎鐘

星今宵意名の人の物語

名声のビル立ち並ぶ星迎

知らぬ間に願の糸で指遊び

星合は雲の重さを量りつつ

残された織女は鯉に餌をやる

空席は星の手向けがいるところ

星祭偽名の人とレモネード

天の川あらゆる同じ日の写真

娘休む街角の七夕踊

ふじ女

梅雨明の川面に映るもの青し

目高市しやがみ込んだり覗いたり

この坂に移動スーパー西瓜買ふ

百日紅父なき家に咲きにけり

いつの間に白百合咲いて友の墓

どこからか猫集まりて熱帯夜

アスファルト熱し夏日が道を灼く

鸛職の上る鉄塔雲の峰

夏木立大きき日蔭をつくりをり

風紋の崩るる砂丘夏の果

松田裕子

朝空を縦横に飛び夏燕

一礼し潜る茅の輪に風が吹く

境内に漏るる雅楽や杜涼し

黄熟の実梅香りて庭に落つ

飲み会は古手ばかりや半夏生

民泊の日焼子集ひ地引網

偽面の笑みに突き出す螢籠

外勤の溽暑の車開け放つ

黒猫のぬつと振り向く木下周

郭公の声聞きながらロープウェイ

森口良樹

子が揃ひ年に一度の西瓜割り

盆用意土鳩の聲が高みより

南方に白くほのかに盆の月

子の去りし長きホームに秋の蟬

淡々と夕餉の仕度秋の蟬

秋の蟬大樹の並ぶ緩き坂

大原良子

旅に居て茅の輪くぐりの列につく

みどり児に江戸風鈴を低く吊り

故郷の友に逢うたり墓参

初生りの葡萄仏に供へけり

かなかなの小さき声で鳴き始む

届きたる朝顔入谷の荷札付き

高嶋絹代

一粒づつ声掛けながら梅を干す

蚊取線香一卷に足る庭仕事

いく筋の柱の傷や蠅叩

バンザイで眠る赤子や夏座敷

採りたてとメモの隣へられ茗荷の子

花擬宝珠女将の忌日近づきぬ

高梨英子

二人して薔薇の香りや眺め入る

夏の蝶汀女の句集読んでをり

夏空や人の行き交ふ狭き路地

小鰯刺頭上を飛ぶや友と居て

吾子眠りアイスクリーム食べてをり

偶然に叔母に逢うたり墓参

土肥律子

軒下に不意にあらはれ揚羽蝶

百日紅遠くから見ゆ田舎道

田園に二羽の白鷺舞ひ降るる

川とんぼ葦の間に見え隠れ

幼子の尺取虫と遊びをり

手花火を持つ手大きくなりけり

美耶

叢に巣立ち間もなき雀の子

地御前の沖穂やかな夏の海

生ぬるき風にあたりて氷菓子

灼くる駅水兵さんと電車待つ

昼休みひとり鶴折る晩夏かな

上島康子

草茂り訪ふ人も無き寺苑かな

いつまでも川鶉羽平す朝曇

体温を越ゆる日もある今夏かな

夏深し二階暮らしのいつまでか

白玉の湯の中に浮く昼下がり

今日よりも明日が暑しと予報あり

早朝に墓参りして安堵せり

手をつなぐ風鈴棚をくぐるとき

難しいけれど匂会へ夏の午後

秋海棠一輪生くるガラス瓶

庫裏の戸の開けられしまま夏灯

極暑かな空気は熱く人もなく

育てたる酸漿使ふ仏花かな

蓮田打つ夕立の中に立つてをり

菜園の茄子の塩もみ美味であり

紀英子

桑門わかこ

須美れい

読書する部屋から見上げ雲の峰

ゆすらの実さくらんぼの方がとくい出せず

歳たびか目覚めて朝の蟬時雨

蚊帳の中なかなか寝付けぬ祖母の家

音で知り布団の中で聞く花火

なつ

花立に潜んでをりぬ青蛙

通勤の途中黙とう原爆忌

幼子の見よう見まねに踊りたる

おしやべりな姪も黙して墓掃除

初秋の空に飛行機雲二本

撫子

早朝の川辺の散歩小鷺居て

夏の蝶木洩れ日の中消えゆけり

次々と夜叉の演目夏神樂

歳重ね夫は目高の趣味を持ち

糸蜻蛉目で追ひかけて見失ふ

みさ子

要検査励ますための鰻かな

餡蜜を身重の娘と食べ比べ

西瓜切り大きい方を呉るる夫

息を止めラムネ玉押し運試し

墓参り胎児の孫も紹介す

山崎桂子

駅ビルの長き工事や大西日

まづ友と出掛けてしまふ帰省の子

トネリコをわづかに揺らし今朝の秋

網を持つ親子の先に赤とんぼ

熊谷ゆり子

百日草まこと百日咲いてをり

風鈴の音を聞きつつ昼寝せり

手のひらに向日葵の種あつめたり

河原静子

玄関は防ぐものなし大西日

知る人のなき里になり暮参

朝の日に五弁を開く芙蓉かな

やす保

万緑や湖を彩る雲白し

原爆忌参列者へとミスト降る

民

令和六年七月度作品集より

綾乃 私の選んだ十句

出水川牛馬の道に轟けり
谷筋に道の名残や時計草
夕暮を枝垂るるままに残花かな
吾が一句貝風鈴に吊しけり
おくるみの頭の見えて夕涼し
万緑や墓石に母の名を刻す
藻の花の富士の流れに咲いてをり
傘さして夏越萩の百段を
母が家に行けば燕も来てをりぬ
短夜や父の介護はまだ続く

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
あざみ
亜矢
井藤希
大畑恵
暁子
ちどり
松田裕子

高尾ひとみ 私の選んだ十句

刑部に輕部に茅花流しかな
吾が一句貝風鈴に吊しけり
義父眠るしづけさに咲き梔子は
万緑や墓石に母の名を刻す
老鶯の声病室にとどきけり
荒梅雨の雨音を聞く夜更けかな
家居して袖下抜くる風涼し
残照に聞こえてきたる河鹿笛
玫瑰や石碑は海に向いて立ち
息をつめ団扇もとまる土俵かな

佐保光俊
あざみ
綾乃
井藤希
大畑恵
暁子
雲雀
松田裕子
森口良樹
須美れい